
東方の短編とか A面

ハンヴィー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方の短編とか A面

【Nコード】

N98390

【作者名】

ハンヴィー

【あらすじ】

東方の短編集です。

「ぼくのかんがえたおりじなるしゅじんこう」が東方キャラとイチヤネチヨする話です。たぶん。

自サイトに公開している短編と同じ内容です。

慧音1

夕食後の一時、慧音の淹れてくれたお茶を、年寄り臭く音を立てて啜っていた時の事だった。

「貴方達。いつになったら子供を作るのかしら？」

お茶噴いた。

そりゃあもう、盛大に。

いきなり、スキマから顔を出した紫さんに、何の脈絡もなく言われたら誰だってそうなる。

「ちょ……！！ ゆ、紫さん！！ いきなり出てきて何言い出すんですかアンタは！！」

「ごほっ……！！ ま、まったくだ！！ 気でも違ったのか！？」

ハンカチで顔を拭きつつ、俺と慧音は、スキマから上半身だけ出している紫さんを睨みつけた。

「貴方達、結婚してもう3年目よね？ 子供が居てもおかしくないと思うのだけど」

「そ、それは…」

「もしかして貴方、種無しなのかしら？」

「違うわっ！！」

俺は真っ赤になって怒鳴り返した。

確かに、ちょっと心配になって永遠亭で調べてもらったりしたけど。

「とにかくだ。タチの悪い冗談なら間に合っているぞ、紫」
「私はいたって大真面目よ」

睨みつける慧音の視線を、紫さんは真っ向から受け止めた。
あれ……？ いつもと違って人の本能的な不安を煽る胡散臭い笑
みが浮かんでない。

っていうか、珍しく真剣な表情をしてるぞ。

俺達は訳が分からず顔を見合わせた。

「別に、貴方達だけに言ってるわけではないの。他の皆にも同じこ
とを言って回っているのよ」

「な、なんでまた……？」

「この幻想郷のためよ」

紫さん曰く、幻想郷のよりいっそうの安定を図るため、力のある
人妖の子供が必要なのだとかなんとか。

「勝手な言い草だな」

慧音が吐き捨てるように言った。

「そんな動機で子供を作るなど御免だ。第一、人にそんな指図をす
るお前はどうかんだ？」

「私？」

慧音の指摘に紫さんは、いつもの胡散臭い笑みに戻り、口の端を
吊り上げた。

紫さんは笑みを浮かべたまま、隙間から飛び降りた。

「こんな感じよ。どう？」

大きな腹部を優しく撫でながら、嫣然と微笑む紫さんに、俺と慧音は呆然とした。

「每晚毎晩、彼に愛して貰っているんだもの。子供が出来て当然よ」

紫さんの口調は得意げであり、俺たちを見下すようでもあった。

「あなた達、愛が足りないんじゃないのかしら？」

その一言で慧音がキレた。

「い、言わせておけば……!!」

「お、おい、けーね……？」

慧音は無言で俺の襟首をひっ掴んだ。

「……やるぞ」

「や、や、や、やるって、何を……？　ちよ、ちよ、ひきずるな、

苦しい……!!」

「ふふふ……がんばんなさいねー」

「ちよ、紫さん！　助けて……!!　ま、待て、けーね！　話せばわかる！　おち、落ち着いて……アーツ!?」

……その時の事はあまり思い出したくない。

むしろ、その歴史を無かった事にしてほしいくらいです。

男としていろんな意味でボロボロになりました。

ただ、その後について一言言えるのは。
数ヶ月後、俺の傍には大きくなったお腹を幸せそうに撫でる慧音
の姿があったという事だけだ。

慧音2

早朝。

激しく戸を叩く音で目が覚めた。

こんな朝っぱらからいったい誰だ。

怒鳴りつけてやろうと、つかえ棒を外して戸を開けると、そこに立っていたのは、ほんのりと顔を赤らめ、大きなお腹を擦りながら嬉しそうに微笑んでいる慧音だった。

「お前の子供が出来てしまったぞ。責任を取ってくれ」

「……えい」

「あっ!？」

俺が慧音の膨らんだ腹部を軽く突くと、そこからボロボロと大量の毛玉が転げ落ちた。

服の中に入れるなよそんなもん。

「む。まさか、こんなにあっさりと見破られるとは」

「……見破られるも何も。子供が出来るようなことは何もしていないだろう」

いったい、何の真似だ。

「っていうか、慧音。さっきの格好のまま、俺の家まで来たのか」
「そうだ」

慧音は楽しそうにクスクスと笑った。

「里の者達が、不思議そうに私を見ていたな。どこに行くのかと聞

かれたから、お前の家に行くんだと答えたら、何故か妙に納得していたが」

「……確信犯かよ」

「ああ、そうそう。偶々会った鴉天狗が、スクープです！ って騒ぎながら物凄い早さで飛んでいったな」

「あぎゃー」

俺は頭を抱えて蹲った。

今頃は里中どころか、幻想郷中にある事無い事が広まっている事だろう。

物音に気付いて顔を上げると、室内に入った慧音が、後ろ手に戸を閉めていた。

って。

何で鍵まで掛けてんのさ。

「まあ、なんだ。嘘から出た真と言う話もあるしな」

「まて、何の話だ」

「さあ、私たち二人の、新たな歴史を作ろう。いや、3人になるのか？」

「3人!？」

「3人とは限らん。双子か、それ以上の可能性もあるし！」
「って、何言ってるんだ!？ や、やめ：アーッ!？」

ままけーね 1

赤ん坊だったその子を拾ったのは、ほんの偶然だった。

里の人間ではない事はすぐにわかった。

私自身、里の人間で子を為した夫婦がいるという歴史を見ていなかったからだ。

「外来人の捨て子、か……」

その子を抱き上げてみる。やはり間違いない。

衣服の素材がこちらのものとは異なっていた。

稀に幻想郷に迷い込む外来人が居るが、生まれたばかりの赤ん坊というのは、私の知る限りでは初めてだ。

博麗大結界の揺らぎによるものなのか、隙間妖怪の道楽の結果だったのか、今となっては真相は分からない。

『この子をお願いします』

お決まりの文章がしたためられた手紙が衣服に挟まっていた。

自分の境遇などまるで理解していないかのように、赤ん坊はすやすやと眠っていた。

このまま放置しては妖怪の餌になるのは目に見えている。

私は赤ん坊を抱えなおすと、人里に向けて飛んだ。

初めは人里の子供の居ない夫婦に引き取ってもらうつもりでいた。流行病で生まれたばかりの子を亡くした若い夫婦が居たので、彼らに引き取ってもらおうと考えた。

若夫婦も子供を亡くして気落ちしていたところだったため、私の提案を喜んで受け入れてくれた。

ところが、いざ赤ん坊が私の手を離れると、それまでおとなしく眠っていたはずなのに、突然火がついたように泣きだしたのだ。

夫婦がどんなにあやしても赤ん坊は泣きやまず、やむなく私が赤ん坊を受け取ると、ぴたりと泣きやんだ。

「慧音様に懐いているみたいですね」

「ここは慧音様がお育てになるのがよろしいかと」

夫婦のその言葉に、私は途方に暮れてしまったが、他に引き取り手も無い以上仕方がない。

そして、その日から、私は母親になった。

「母さん。子供たちはみんな帰ったよ。戸締りも終わった」

「そうか。御苦労様」

あれから20年。

息子は、今では立派な青年となり、私の寺小屋の手伝いをしている。

人当たりが良く教え方が丁寧と、子供たちにも父兄にも評判で、母親としては鼻が高い。

それに、親の鼻目というのもあるだろうが、中々の美男子に育ってくれた。

村の娘たちの中には息子に想いを寄せている者も少なからずいる

ようだ。

あとは良き伴侶を得て、子を為して幸せな家庭を築いてくれれば、何も言う事はない。

「すまないが、先に家に戻っていてくれないか？ 私は、明日の授業の準備をしてから帰る」

「ああ……」

返事をしつつも、息子は動こうとしない。

何かを言いたそうにしているが、口に出せないでいるようだった。

「どうした？」

「その、ちょっと相談に乗って欲しいことがあるんだ……」

「ふむ……」

いつになく歯切れが悪い。

もしかすると、これは……

「どうした？ 好きな女でも出来たか？」

冗談めかして訊ねると、息子はハッとして表情になった。

「どうやら凶星のようだ。」

さて、息子の眼鏡に適ったのは一体どんな娘なのだろうか。

「実は……そうなんだ……」

真っ赤になって俯いてしまう息子に、私は少しばかり驚いた。

そして、一抹の寂しさも覚えた。

「相手は私の知っている娘なのか？」

「あー、まあ。そうだよ」

私の知っている娘となると……妹紅以外、碌なのがないぞ。
もしかして、相手は妹紅なのか？

妹紅は確かに良い子だが、息子の相手としては少し問題が……

「見当がつかないな。いったい誰なんだ？」

「それは……」

息子は意を決したように顔を上げると、私の方に歩み寄って来た。

「母さん、好きだ……！！」

気がついたとき、私は息子に抱き締められていた。

帽子が床に落ちる音が、やけに大きく聞こえた。

何を言われたのか、何をされているのか、即座に理解出来なかった。

私は呆けたように、息子にされるがままになっている。

「俺は、母さんを、女として愛してる」

いったい、この子は何を言っているんだ？

母親である私を、女として愛してるだと？

振りほどかなければ。

そして、馬鹿な事を言うなと頭突きを食らわせなければ。
しかし、出来ない。

男とはいえ、息子は人間で私は半獣だ。

力で敵わないはずがない。それなのに。

「母さん……」

「だ、だめ。やめて……」

まるで自分のものとは思えない、弱々しい拒絶の声が出るだけ。
息子の指が私の顎に触れ、そつと顔を上に向けられる。

ああ。いつの間にか、こんなに背が高くなっていたんだな。

「愛してる……慧音……!!」

唇が重ねられた。

その瞬間。

私の中で必死に守っていた最後の一線が。

音を立てて、キレタ。

ままけーね2

「愛してる……慧音……!!」

唇が重ねられた。

その瞬間。

私の中で、決定的な何かが、音を立てて切れた。

身体から力が抜ける。

崩れ落ちそうになり、反射的に息子の首に腕を回す。

完全に息子に体重を預けるような体勢になってしまう。

息子はより一層激しく私を求めてきた。

「慧音……慧音……」

名前を呼ばれるたびに、理性が失われていく。

もっとこうしていたい。この子が欲しい。

脳内に靄がかかったかのように思考が曖昧になり、妙な浮遊感を伴い感覚が覚束ない。

地に足が着かないとはこういうことを言うのだろうか。

「慧音、大丈夫？」

気がつくとき、私は文字通り宙に浮いていた。

背中と膝の裏に手を回される形で、抱きかかえられていた。

いわゆる、お姫様だっこ状態だ。

「いきなり倒れちゃったからびっくりしたよ。少し急過ぎたかな？」

微笑みながら囁くその口調は、母親に対するものではなく、恋人

に対するそれのように甘い。

「心配だから、このまま家まで運んで行くよ」

「だ、大丈夫だから。お、降ろして……」

こんな所を里の人間に見られたら、いったいどのように思われるか。

想像するだけで気が遠くなる。

「おや。今、帰りなのかい？ それに、慧音様……？」

考えているそばから、里の男に見つかってしまった。とっさの言い訳も思いつかず、私は小動物のように身を竦ませる。

「やあ、ゲンさん」

息子は、さも偶然道端で知り合いに会ったとばかりに、自然に挨拶を返す。

「母さんが倒れちゃって。無理はしないでっていつも言ってるのに」

「大丈夫なのかい、慧音様は。顔が赤いみたいだけど」

「うん。少し熱があるみたいなんだ。まあ、家に戻れば永遠亭から貰った薬があるからね」

「そうかい。慧音様も、あまり無理はなさらないようにしてください」

「わ、わかった……」

「では」

男は特別不審がらず、軽く頭を下げるとそのまま去って行った。知らず知らずのうちに安堵の息が漏れた。

「もう少しで着くから。それまでの辛抱だよ」

耳元で囁く声に背筋がぞくりと震える。

私は今、どんな表情をしているのだろう。

息子はそんな私に、心配ないとばかりに微笑みかけた。

家に着くまでの間、何度か里の人間と会ったが、息子の対応に誰も不審は抱かなかった。

それだけ、我が子が里の人間から信頼を得ている証左とも言えるが、今はそれを素直に喜べない。

「さあ、着いたよ。慧音」

息子は私を降ろそうとしない。

このまま寝室まで運ぶつもりなのだろう。

私には既に抵抗する気力は無い。

息子は、壊れ物でも扱うように、そっと私を蒲団の上に横たえた。

「慧音。これからは、たっぷり可愛がってあげるから」

私の頬を撫でながら、愛しそうに囁いた。

私は何もかも受け入れる覚悟で、静かに目を閉じた。

昼は親子として。夜は恋人同士として。
これまで抑えてきた反動からなのか、私たちは狂ったように求めあった。

誰にも打ち明けることのできない関係。

しかし。

そんな背徳的な蜜月生活は唐突に終わりを告げる。

私が身籠ったことによって。

ままけーね3

「な、なな、ななな、なん……！！　なんだ、これはっ！？　こ、こ、こんな……！！」

「出来れば感想が聞きたいな。まだ途中だけど」

「か、かかか、感想だと！？」

「うん」

慧音は顔を真っ赤にして黙り込んでしまった。

うーん、真面目な慧音に近親モノは刺激が強かったかな？

だけど、エロ小説家としては、そういう初々しい反応も結構貴重だったりするんだよね。

「そ、外の世界では、こういう破廉恥な文章に需要があるのか……？」

「うん。まあ。特殊な層とかには割と」

「そ、そうか……まあ、それは良い。それは良いが……」

慧音は原稿を放り出し、畳をバンと叩いた。

「どうして、母親の名前が私で、息子の名前がお前なんだ！？」

「あー、なんか適当なのがいっつかんかった」

「思いつかなかった、だと！？　だからと言って……！！」

「そそるだろ？」

「そそるか、馬鹿っ！！」

とりあえず、期待通りのリアクションを得ることは出来た。
今回はこのプロットで行くでしょう。

俺は作業机に向かい、続きを書き進めるべく筆を走らせる。

「ま、まさか、それを完成させて出版する気か!？」

「うん。そう。ああ、登場人物の名前はちゃんと変えるから大丈夫だよ」

「当たり前だ。それより……」

「うんー？」

「いい加減、こんな商売は辞めにしたらどうだ？」

「だって、他に取り柄が無いしー。需要だってあるしー」

エロ小説は娯楽の少ない幻想郷では中々に好評だ。

結構良い商売になってそれなりに稼がせてもらっている。

挿絵とか入れられればなお良いんだろうけど、残念ながら、そっちの才能は欠片もない。

「お前は物知りだし、頭も良い。口もまわる。私と一緒に寺小屋の教師をやらないか？」

「えー、俺、ガキ嫌いだし。ガキをこさえる行為は大好きだけど」

「ッ!!! 馬鹿!!!」

「いてっ!!!」

座布団をぶつけられた。

振り返ると、ドタドタと肩を怒らせて去っていく慧音の後ろ姿が見えた。

頭突きされなかっただけましか。

そんな事があった後、しばらく執筆作業に専念していてふと気がつく、いつの間にか、夜になっていた。

明かりをつけようと作業を中断して席を立った時、何やら旨そうな匂いが漂っていることに気づいた。

「邪魔するぞ」

振り返れば、お盆を手にした慧音が立っていた。
旨そうな匂いはその上に乗っている料理からようだ。

「台所を借りた」

「あ、ありがとう。てっきり帰ったのかと思ってたよ」

「一度帰って、材料を持って戻ってきた」

あー、なるほど。道理で。

自炊なんて滅多にやらないはずなのに、目の前には立派な焼魚定食があるのはそういう理由か。

「台所が荒れ放題だったぞ。まともな食事をしているのか」

「もぐもぐ……ん、まあ、そこそこ……ごくくん」

「食べるか喋るかどっちかにしろ」

質問してきたのはそっちじゃんかよう。

「この書斎にしてもそうだ。少しは整頓したらどうだ？」

「もぐもぐ……いや……これはこれで……ごくくん。どこに何があるか分かってるんだよ。御馳走様」

「どうか……御粗末様」

ふー。

何時間もぶっ通しで執筆していたせいか、腹が一杯になったとたん眠くなってきたな。

欠伸交じりにごろんと横になる。

「こら、行儀が悪いぞ!! 食べてすぐ横になるんじゃない!」

お、良い所に枕も発見。

「聞いているのか……って！ 私の膝を枕にするなっ！！」

「口ではそう言いつつも、愛する人に膝枕をするというシチュエーションに胸の高鳴りが止まらない慧音であった、まる」

「勝手なモノローグを入れるな！」

「どうしたんだよ、慧音。息が荒いぞ？ 陣痛か？」

「お、お前というやつは……！！」

そろそろ潮時だな。これ以上やると頭突きを食らう羽目になる。

「慧音ってさ」

「なんだ？」

「ダメな男に引っ掛かって苦労するタイプだよな」

慧音は呆氣にとられたように口を開いたあと、諦めたように深い溜息を吐いた。

「私もそう思うよ」

「現在進行形で苦労しているもんなあ」

「まったくだ」

「でも、俺のことが好きなんだよね」

「腹立たしいことにな」

「俺も慧音の事が好きだよ」

「どうだか。信用できんな」

「そんなことないよー。俺はいつも慧音の事を想って眠れない夜を過ごしてるんだじえー」

「うそだ」

「うそじゃないって。今だって、隙を見て押し倒して、あんなこと

良いな出来たら良いな、みたいな事を考えてるんだ」
「……」

やべ。調子に乗りすぎたか。

「じ、じゃあ……」

「う……？」

「あれ、やってくれないか……？」

「何？ 押し倒せて？」

「ち、違う！ その、お、お前の小説の中にあつた……」

ああ、もしかして。

「お姫様だっこか？」

「っ……」

おお、顔が真っ赤になった。凶星か。

にしても、そんなのに憧れるとは意外だ。

「オーケー。任せろ」

俺は起き上がり、慧音の背後に回り込んだ。

おもむろに背中と膝の裏に手を伸ばす。

「いいか？ 持ち上げるぞ」

「あ、ああ」

そのまま腰に力を入れて、中腰の姿勢から一気に立ち上がる。
あまりの軽さに勢いあまって後ろに倒れそうになった。

「つとと……軽いな、お前。ちゃんと食ってるのか？」

「お、お前よりはまともな食生活をしている」

「そっか。で、どうよ？」

「どうって？」

「だから、感想」

「あ、ああ。悪く、無いな」

やっぱり、女の子はこういうのに憧れるのかねえ。

「昔付き合ってたメンヘラ気味の元カノも好きだったっけな……あ」
「昔『付き合ってた』？」

しまった。何で好き好んで地雷踏むかな俺は。

「い、いや。あれだ。幻想郷に来る前の話だって！ 昔の話だよ。
いわば、俺の黒歴史だ！」

「ほう。では、その歴史を無かったことにしてやろう」

「ちょ……！」

「ふん。冗談だ」

けーね先生。貴女が言うのと全く冗談にならないので勘弁してつかあさい。

「だが、私を不愉快にさせた罰として、暫くこのままだ」
「ええ！？」

いくら軽いとはいえ、人一人分の体重を抱えているのは結構疲れるんだけど。

まあ、いいか。

このくらいで機嫌を直してくれるなら安いものだ。

楳1

「子供の寝顔と言うのは、可愛いものですね」

「まあ、そうだな」

ガキなんて、ピーピーぎゃーぎゃー泣き喚き、糞尿を垂れ流すだけの鬱陶しい存在でしかない。

そう考えていた時期が俺にもありました。

「一日の終わりに、この子の寝顔を見るだけで、疲れが吹き飛んでしまいます」

柔らかな笑みを湛えた妻の視線の先には、今年で3つになる俺達の娘の姿があった。

安らかな寝息を立てている娘は、妻をそのままデフォルメしたような可愛らしい。

……俺に似なくて本当によかった。

唯一、髪と耳の地毛、そして尻尾の色だけが、俺の遺伝子を受け継いだかのように黒一色だ。

そう、白狼天狗にもかかわらず、だ。

「心配だ」

「何がですか？」

「将来、この子が、天狗社会で苛められたりしないかと思ってね」

幻想郷では、人間と妖怪が子供を作るなんてことはそれほど珍しい話ではない。

しかし、それが天狗となれば話は別だ。

天狗は、妖怪の中でもかなりの上位に位置し、幻想郷のパワーバ

ランスの一角を担っているという強い自負から、排他的で他の種族を見下しがちだ。

そんな天狗社会の一員である妻が、種族として遥かに格下の、それも何の能力もない人間と契り子を成した。

血族としての優位性を至上としている連中からすれば、人間との合いの子など、とても許容できるものではないだろう。

「大丈夫ですよ。文さんの新聞のおかげで、そういう古臭い考え方も、徐々にですけど変わってきているんです」

彼女は、そう言って俺の心配事を一笑に付した。

「私達の結婚の事や、その後の夫婦生活や子育ての事を逐一記事にして、人里といわず妖怪の山といわず、新聞をばら撒いていたおかげで」

「むしろ、やり過ぎなんじゃないかって思うくらいだったな」

「確かに、ちょっと行き過ぎではありましたね……晩のおかずの事とかをいちいち記事にしたりとか……」

晩のおかずぐらいならともかく、夫婦の夜の生活についてまでしつこく食い下がってくるのには辟易した。

何が楽しくて、そんなプライベートまで暴露しなきゃならないんだ。

「……あなたの心配は理解できます。長年続いてきた因習が、そう簡単には変わるとは思えません。もしかしたら、あなたの心配が的中するかもしれません」

妻は、慈しむような笑みを浮かべ、娘の柔らかな黒髪をそっと撫でた。

眠っていても、母親に撫でられているのは分かるのか、娘の口元には笑みが浮かんでいた。

「でも、きっと大丈夫です。この子は、私達の子ですから」

「……そうか」

「人間の常識にも、天狗の常識にもとらわれない、強い子に育ってくれるはずです」

「常識にとらわれないってのも、善し悪しだとは思うけどねえ……」

ふと、守矢神社の巫女さんの事が脳裏をかすめた。

強い子には育ってほしいけど、ミラクルフルーツライスシャワーな子にはなってほしくないな。

「だから、ね」

妻は俺に寄り添うようにして、身体を預けてきた。

俺は、妻の肩をしっかりと抱き寄せる。

「信じましょう？ この子と、私達の未来を」

「そうだな」

愛娘の安らかな寝顔を見つめ、妻の言葉にしっかりと頷いた。

継代飼育1

「ハムスターって可愛いわよね」

紫が何の脈絡もなく唐突に言った。

紫を見ると、その手には『可愛いハムスターの飼い方』なるタイトルの本があった。

ハムスターの飼育本らしいが、外の世界から持ってきたのだろうか。

もしかして、飼いたいのか？

ハムスターって幻想郷に居るのか？

あれが日本に入って来たのは確か昭和初期のはずだから、その可能性は低い。

そもそもこの屋敷には、げっ歯類の捕食動物である藍や橙が居るんだが。

「あら。それを言ったら、私は人間の捕食動物ですわ」

紫は本で口元を隠し、可笑しそうに微笑んだ。

言われてみれば、確かにそうだ。

「どんなに大事に飼っても、長生きして3、4年なんて、切ないわよね」

「小動物だしねえ」

何の気なしに相槌を打っていたら、いきなり背後から抱き締められた。

いつの間にやら、スキマを開いて俺の後ろに移動していたらしい。

「……紫？」

俺の問いかけには答えず、紫は抱き締める腕に力を込めた。背後に当たる胸の感触か、何というかその色々とまずい。

「私からすれば、貴方も同じよ」

紫の吐息交じりの声が耳朶をくすぐる。

「どんなに愛しても、例えどこかに閉じ込めて大事に大事に飼ったとしても、人間である以上、貴方は私より先に逝くわ」

「それは……仕方がないよ」

「ええ、仕方がないことだわ。でも、私は嫌」

「紫」

「私を狂わせるだけ狂わせて、先に逝くなんて許せません」

だからね、と紫は言葉を続ける。

「とてもいい事を思いついたの」

「な、何かな？」

どこことなく不穏な空気を感じ取り、俺の声は上擦った。

「継代飼育って知ってるかしら？」

「……なにそれ？」

「ハムスターのように、寿命の短いペットを繁殖させて、その子供に更に子供を作らせて……と世代飼育していく方法よ」

「ふうん」

「そうすれば、たとえ可愛がっていた子が死んだとしても、その子

の残した子孫が居るから、少しは寂しさを紛らわせるでしょう?」

「はあ」

「つまり、可愛がっていた子とずっと一緒に過ごすのではなく、その子の遺伝子と共に過ごすというわけ」

「なるほど」

で、それがいったい何だっと言うんだ?

「わからないかしら?」

「わかんないよ」

肩越しに振り返ると、紫と目があった。

そこにはいつもの胡散臭い笑みではなく、思わず見惚れるほどに真剣な表情があった。

「貴方で同じ事をしようとしているのよ」

「へ……?」

それはつまり。

「俺と誰か人間の女とで子供を作らせて、その子供を繁殖させて……紫が飼育するってことか?」

「違うわよ。なぜ、貴方を私以外の女と番わせなきゃならないの」

「じゃあ、俺と紫で子供を作るってことでいいのか?」

「確かに、私と貴方の間に子供が出来れば、貴方が生きていた証は残るわ。でも……」

仰向けに引き倒され、紫の膝に上半身を預けるような体勢になった。

「でも、貴方の生きた証というだけであって、貴方自身ではないわ。だからね」

上下逆さまの紫の顔が、俺の顔のほんの数センチの距離にあった。

「貴方の魂にちょっとした細工をしようと思うの」

「さ、細工……？」

「そう」

「い、いったい、何を言って……むぐっ」

唇をふさがれた。

それはもう、形容しがたいほどねっとり。

恋人同士なんだから、紫とのキスが初めてというわけじゃ無いし、それ以上の事もガンガンやりまくっているが、今日のそれはいつもと違っていた。

混乱する俺の口を舌で強引に挟み開け、紫は唾液とともに何かを口内に送り込んできた。

舌触りからすると、餡蜜に入っている白玉を大きくしたような形状のフヨフヨとしたものだった。

訳が分からず、舌で押し返そうとするが、抗しきれずあっさりと飲み込んでしまう。

結構な大きさのものだったが、不思議な事にあっさりと喉を通過して胃に落ちて行った。

いや、腹の中におさまったというより、俺の体内に溶けてしまったというほうが正確だろうか。

「……ぷはっ!!」

俺が飲み込んだのを確認したところで、紫はようやく唇を離した。

「な、なんだ、今の……？」

「今のは、私の霊力を凝縮したものよ。そうね…私の魂の一部と言っても良いかしら？」

「な、なんだって…？」

「私の一部だから、常に母体である私の中に戻ろうとするの。私とひとつになろうとするの」

紫は幼子をあやす母親のように微笑み、優しく俺の髪を撫でつけた。

「貴方が人としての生を全うし、寿命が尽きた後、貴方は私の中に戻ってくるの」

「紫……」

「そして、私が母親として貴方を産み育て、妻として番い、生を終えりとまた私の中に戻ってくる。その繰り返し」

童女のような満面の笑みを浮かべ、紫はさらに言葉が続ける。

「貴方の残す遺伝子を愛でるのではなく、何度も生まれ変わる貴方の魂を未来永劫、愛で続けるの。私の命の続く限り。素敵でしょう？」

「あー……もしかして……」

俺は苦笑しつつ頬を掻いた。

「詰んだかな？」

「ええ、そうね」

紫は可笑しそうにクスクスと微笑み、もう一度、俺に口づけをした。

「もう私からは決して逃れられないわ」

俺の意思なんて最初から求めていない一方的な宣言。

そのはずなのに、恐怖や絶望は一切感じない。

俺の中に溶けた紫の魂の一部のせいなのか、紫と共にあり続ける事ができる安堵感に満ち足りていた。

「んー、何か眠くなってきた」

「あらあら。良いわよ。このまま膝枕してあげるから眠りなさい」
「ん、そうする」

心地よい紫の体温を感じつつ、俺の意識は眠りに落ちて行っった。

継代飼育2

「ねえ、永琳」

「どうしたんです、姫」

「あの子の子供が見たいわ」

「また、突拍子もないことを……」

輝夜の言う「あの子」とは、永遠亭に幼いころから住み込んでいる外人だ。

外の世界で両親に山奥に置き去りにされ、泣きながらさ迷い歩いているうちに幻想郷に迷い込み、永遠亭に保護されたのだ。

そのころはまだ4、5歳程度の年齢だったが、現在では20代半ばの青年に成長していた。

鈴仙とともに永琳の助手を務めており、簡単な医療行為なら単独で行える程度の知識と技術は既に身につけていた。

「別に昨日今日思いついたわけじゃないわ」

そう言って輝夜は嘆息した。

輝夜の手には、『可愛いハムスターの飼い方』という本があった。

「姫、その本は？」

「これ？ 少し前に、隙間妖怪が来て放り投げていったのよ」

輝夜は永琳に向かって、本をヒラヒラと振って見せた。

「あの子、普通の人間でしょう？ イナバ達よりも早く老いて死んでしまうわ。私のペットの中で一番寿命が短いわ」

「まあ、そうですね」

「この本にね、継代飼育って方法が書いてあったの」

小動物愛好家が行う飼育方法の一種で、ハムスターなどの寿命の短い動物を繁殖させ、その子供を更に繁殖させて世代飼育していく方法だ。

累系代飼育などとも呼ばれる、ライフスパンの短い動物と末長く付き合うための飼育法の一つだ。

「それであの子の子供、ですか」

「そうよ。適当な女と番わせて子供を作らせたらどうかしら」

「完全にあの子の意思を無視してますね……」

永琳は、頭痛でも堪えるかのように眉間に手を当て揉み解した。

「そういえばあの子、ウドンゲと交際していますね」

「丁度いいわ。なら、イナバと子供を作らせましょう」

「とことん二人の意思を無視してますね……」

「どうして？ お互い好き合っているのなら問題ないでしょう？」

それに、人間と玉兎の間に子供が出来るのかどうかも興味深いし」

新しいおもちゃでも目にした子供のように、輝夜はキラキラと目を輝かせた。

結局、悠久を生きる彼女にとっては、束の間の暇つぶしの種ではないのだろう。

「……とりあえず、その必要はありませんよ」

「なぜかしら」

「ウドンゲは既にあの子の子供を身籠っていますから」

慧音3

人里の連中に、上白沢 慧音とはどんな人物かと訊ねれば、まず悪い評価は返ってこないだろう。

どんな時でも泰然と、どれほど些細な相談事でも真摯に耳を傾ける里の顔役。異変に際しては、人里に危害が及ばないよう目を光らせる人里の守護者。子供たちや父兄にとっては良き教師でもある。そんな彼女の悪い評価など、聞こうと思っても聞けるわけがない。せいぜい、寺小屋の生徒が、授業内容や頭突きに対して文句を言うくらいだろう。

「ただ〜いまあ〜」

夕飯の支度をしていた俺の耳に、間延びした女の声が聞こえた。それと同時に、何かがひっくり返るような、どさりという音。

おかえり、と返しながら、声の主を出迎えるため、割烹着姿のまま玄関に出た。

そこには、玄関の三和土たたきに乱雑に靴を脱ぎ散らかし、トレードマークの帽子を放り投げ、だらしなく寝そべっている慧音の姿だった。

「あー、今日も疲れたよう」

「はいはい、お疲れ様」

放り投げてある、帽子を拾い上げ埃を払い、帽子掛けに掛けた。

「今日の晩御飯は何？」

「慧音の大好きなカレーライスだよ」

「カレーー！！ やったー！！」

慧音は子供のように満面の笑みを浮かべ、ガッツポーズをとった。

「ほらほら。服が汚れるから、立って立って」

「はい」

俺の差し出す手に掴まり、慧音はのろのろと立ち上がった。

「だらだらしないで、ちゃんと立つ！」

「もう、うるさいなあ」

慧音はぷつと頬を膨らませ、不満そうに俺を睨みつけた。

「こっちは疲れてるんだからさ、もう少し優しく出来ないの？」

「……言う事を聞かないと、盛りを減らすぞ」

「あう！ ご、ごめんなさいっ！ 謝るから、そんな事言わないで
ー」

子供の様に拗ねる慧音にそう宣告してやると、途端に血相を変え、哀願するように俺の腕にしがみ付いて来た。

ふふふ……

家庭だろうが国だろうが、世の中は台所を握っている奴が一番偉いのだ。

「靴もきちんと下駄箱にしまおう！」

「はい」

盛りを減らされるという一言が効いたのか、慧音は俺の言葉に素直に従った。

脱ぎ散らかした靴を、いそいそと下駄箱にしまう。

「もうすぐ出来るから、大人しく居間で待ってる事。良いね？」
「分かったー」

俺の横をすり抜けて居間に向かう慧音に続き、俺も台所に戻った。

「さあ、出来たよ」

お盆にカレーと味噌汁、付け合わせの福神漬けを乗せ、居間で待っている慧音の元に運ぶ。

カレー特有の香辛料の香りに、空腹に耐えかねていたらしい慧音は、子供のような歓声を上げ、手に持ったスプーンで卓袱台をカンカンと叩いた。

行儀の悪さを苦笑しながら咎めつつ、慧音の前にカレーの皿を置いた。

「いただきますーす！」

俺が席に着くのを待たず、慧音は無我夢中でカレーを食べ始めた。まるで、ハムスターのように頬っぺたを一杯にして、幸せそうな表情でもぐもぐと咀嚼する。

「んー、おいしー」

無邪気なその表情に思わず頬が緩んでしまう。

「慧音。頬っぺたにご飯粒がついてるよ」
「んー、取ってー」

「自分で取りなさい」

「そして、それを食べて、ふふふ……慧音の味がするねってやってー」

「やりません」

里の連中が今の慧音を見たら、きっと腰を抜かすに違いない。

なにしろ俺自身、彼女と親しくなるまで、彼女の本性がこんなにも子供っぽいものだったとは知らず、始めの頃は戸惑ったものだった。

彼女と付き合いの長い妹紅の話では、慧音は元々、子供っぽく素直で奔放な性格だったらしい。しかし、里の守護者というのは、俺のような凡夫では想像も出来ないほどの重圧とストレスがかかるものらしく、次第に慧音は、物腰も言葉遣いも堅苦しいものになっていき、本音を吐露するのは、妹紅の前でだけになってしまったのだそうだ。

「あんたの前で、慧音がそういう顔を見せるようになったってことは、それだけあんたの事を信頼してるって事なんだ。だから、大変かもしれないけど、しっかり受け止めてやってくれ」

慧音と付き合い始めたばかりの頃、神妙な面持ちで、妹紅は俺に語ったものだった。

まるで、娘を嫁にやる父親のような表情だったのが、印象的だった。

「……でね、でね、私の話、ちゃんと聞いてる？」

「ああ、うん。聞いているよ」

食事と入浴を終え、俺達はくつろぎタイムに入っていた。

俺に背中を預けるようにもたれながら、慧音はその日の出来事を俺に話してくれる。

そのほとんどが、里の人間に対する愚痴だ。

「ほんと、困っちゃうわよ。何で私が、夫婦喧嘩の仲裁までやらなきゃならないんだか」

こうやって慧音の愚痴を聞いてあげては、その心労を少しでも軽くしてやっているのだ。

こんなことぐらいで、彼女の負担を多少なりとも軽くしてやれるのなら、お安い御用というものだ。

「その前なんて、牛の乳が出なくなったからどうにかしてくれ、なんて。知るかかっていうの」

「うんうん。そうだね」

相槌を打ちながら、慧音のサラサラの髪に手櫛を入れる。

俺のグルーミングに、慧音は心地よさそうに目を細めた。

外来人である俺が言うのもなんだけど、人里の人間は、少し慧音に甘え過ぎだと思う。

慧音が甲斐甲斐しく人里の連中の世話を焼くものだから、すっかり頼りきっているのだ。

それでも、人間が大好きな慧音は、俺に愚痴を零しこそすれ、決して連中を突き放すような事はしないのだ。

少しは突き放してやったほうが、あいつらの為だと思うんだが。

「ねえ……」

そんな事を考えていると、慧音が俺のほうに顔を寄せて来た。
風呂上がりで上気した頬、訴えかけるように潤んだ瞳にどきりと
する。

「そろそろ、赤ちゃんが欲しいなあ」

「赤ちゃんか……」

夫婦なのだから、当然、夜の営みもあるが、慧音が明確にアピールしてきたのは、今回が初めてだ。

俺はそっと、慧音の耳元に口を寄せた。

「慧音みたいなずぼらな子に、お母さんは務まりません」
「ひどーい！」

冗談めかして言ってやると、予想通りの反応を返してくれた。

「私だって、赤ちゃんが生まれれば、ちゃんとするよう！」

そんな「来年から本気出す」みたいな事言われても。

「赤ちゃん、欲しくない……？　今なら、授かりそうな気がするの」

甘えるような媚びるような上目遣いで、俺の顔を見上げながら、
体重を預けてくる。

うん、やばい。非常にやばい。

身体の感触が、主に胸の感触とかが非常にやばい。

そういうことは、せめて寝室で……と思いつながらも、俺の手は動き、慧音の肩にかかる。

慧音は微笑みながらおとがいを上げ、そっと目を閉じた。
桜色に潤んだ唇に、自分の唇を重ねようとしたその時だった。

玄関の戸を乱打する物凄い騒音が響き、俺と慧音は弾かれたように離れた。

「慧音様！ 慧音様！ 大変だああああ！！」

玄関の方から、壮年の男性のだみ声が聞こえて来た。
この声は……3軒先のゲンさんの声だ。

「どうした！ 何があった！」

セリフの後ろに「キリッ」とでも付きそうなほどに、凜々しく頼もしい声で応えながら、慧音は立ち上がった。

瞬く間に寝巻から普段の服に着替え、玄関に向かって慌ただしく駆けて行った。

そのあまりの変わり身の早さに、俺は呆然と慧音の後ろ姿を見送った。

慌てて、俺も寝巻から着替えると、慧音の後を追う玄関に向かった。

玄関先では、慧音とゲンさんが何やら深刻な表情で話しあっていた。

先程までの子供っぽい無邪気さなど欠片もない里の守護者の顔で、慧音は真剣にゲンさんの話を聞いていた。

「ゲンさんの所の子が急病らしいんだ。今から、その子を永遠亭に連れて行く」

慧音は俺を振り返り、力強い声で言った。

当然のことながら、先程までの艶っぽい雰囲気など、微塵も感じさせない。

「分かった。気を付けて」

「ああ、行ってくる。先に休んでいて構わないから」

慧音はそう言い残し、申し訳なさそうに何度も頭を下げるゲンさんと共に、外に出て行った。

二人を見送った俺は、苦笑と共に溜息を吐きだした。

ちよっともったいなかったな、などと考えながら、屋内に引き返す。

休んでいて構わないなどと格好よく言っていたが、言葉どおりに俺が先に寝ていたりすると拗ねてしまうので、当然彼女が返ってくるまで起きているつもりだ。

とりあえず、彼女の為にもう一度風呂を沸かしながら、ゆっくりと帰りを待つ事にしよう。

風呂場でさっきの続きというのも、良いかもしれない。

継代飼育1の続き

彼女の中は、とても温かく柔らかい。

羊水という生命の海をぷかりぷかりと漂う何とも言えない浮遊感
は、実に心地の良いものだ。

しかし、それでもやはり難点はある。

する事が無いので、どうしようもなく暇なのだ。

俺はそつと足を伸ばし、彼女の子宮の壁を軽く蹴った。

急に足を伸ばすと、彼女が驚くかもしれないから、あくまでそつ
とだ。

『どうしたの？』

ほどなく、彼女の声が聞こえた。

聞こえた、というのは正確ではない。

頭の中に直接彼女の思念が流れて来たような感じだ。

実は案外、臍の緒を通じて、有線通信を行っているのかもしれない。
い。

彼女の声に、暇なんだと答えると、彼女の微笑む思念が頭の中に
流れ込んできた。

『あらあら……それじゃ、お話してあげましょう』

そんな事よりも、お得意の境界操作でさっさと俺を成長させて、
早く産んでほしい。

『駄目よ、そんなの。風情が無いわ。それに、妊婦をじっくり堪能
したいし』

おそらく、彼女は愉快そうに微笑んでいるのだろう。
子宮越しにでも、彼女がお腹を優しく撫でているのが分かった。

『あと3カ月なんだから、もう少し我慢なさい。ね?』

3か月もこの状態が続くのか。鬱だ。

『まあまあ……退屈しないようにお話をしてあげるから』

紫は腹部を撫でながら、今の幻想郷の様子を教えてくれた。

藍が相変わらずの苦労性である事や、その式である橙が八雲の姓を付けるほどにまでに力をつけた事、霊夢の曾孫にあたる巫女が、霊夢に匹敵する力の持ち主で、幻想郷のより一層の安定が図れる事などなど。

わりと明るいニュースばかりだったので、ちょっと安心した。

安心すると同時に、ふとした疑問が頭に思い浮かんだ。

なあ、紫と彼女に語りかける。

『どうしたの?』

俺は、産まれたら、紫と同じ妖怪になるのか?

『違うわ。人間として生まれ、人間として育ち、人間として死ぬ。

そして私の中に戻って来る。前に話したでしょう?』

ああ、そう言えば、そうだったっけ。

俺は、前世（という言い方が正しいかどうかかわからないが）の記憶を思い返した。

俺の魂には紫の魂の一部が完全に溶け込んでいる。紫が言うには、俺の魂自体が、紫の一部になっているのだ。

言うなれば、分け御魂ね、と彼女は嬉しそうに笑った。

90歳という、人間にしては長寿のうちに大往生を遂げた俺の魂は、彼岸にわたる事は無く、まるで吸い込まれるように紫の中に取り込まれていった。

そして、紫の子宮を苗床に、胎児という肉の器を得て、出産によって現世に戻って来るのだ。

これから先、幾度となくそれが繰り返される事になる。紫自身が滅ぶまで。

『ああ、楽しみだわ。愛しいあなたを産むのが。愛しいあなたに乳を与え、育てるのが。成長した愛しいあなたと番うのが。老いて死んでいく愛しいあなたを見送るのが。生を全うした愛しいあなたが私の中に戻ってくるのが』

紫は歌うように言葉を紡ぐ。

『でも、それ以上に、あなたが私の中で元気に育っているのが実感できるこの瞬間が一番幸せ』

おいおい。

まさか、いくらなんでも、子宮の中にずっと閉じ込めたままって事は無いよな……？

『それは良い考えね。ずっとあなたと一緒にいられるわけだし、他の女の目に触れる事もないし、ずっと妊婦でいるのも悪くないわね』

うおおおー！！ 出せえええええ！！

俺は、めちゃくちゃに手足を振りまわし、子宮の壁を蹴った。

『あんっ！ もうっ、冗談よ冗談。ふふふ、こそばゆいわ。ちゃん

と産んであげるから。安心しなさい』

本当だな。本当だな！？

『本当よ。閉じ込めたままじゃ、あなたを愛でる事は出来ないもの』

まあ、閉じ込められなくても、俺はもう、お前からは逃げられないからな。

『ええ、そうよ。だから、そんな無意味な事はしないわ。安心なさい』

安心して良いのかねえ……

今更、後の祭りではあるけど。

ああ、畜生。眠くなってきた。

『あらあら。無理はしないでおねんねしなさい。子守歌を歌ってあげるから』

そうする。

次に目が覚める時は、産まれていると良いな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9839o/>

東方の短編とか A面

2011年3月26日00時20分発行